

伊都郡かつらぎ町所在

# 船岡山遺跡発掘調査概要 Ⅱ

1981. 3

和歌山県教育委員会

## 序 文

南北に対峙する妹山・背山に挟まれ紀の川川中に位置する船岡山の偉容は、右岸堤防上の国道24号線から望むことができ、古来より景勝の地として知られているところでもあります。紀の川の治水安全度を向上させるために、建設省近畿地方建設局がこの船岡山の一部を削平することになり、本県教育委員会は昨年度に範囲確認調査を実施し、その結果に基づいて本年度より全面発掘調査を開始しました。

調査の成果については、本書に概述されているように、弥生時代のみでなくその後も人々がこの島に営みの痕を遺したことが明らかにされ、次年度以降の調査が鶴首される場所でもあります。

本年度の調査にあたっては、地元かつらぎ町教育委員会、近畿地方建設局和歌山工事事務所、同かつらぎ出張所をはじめ各関係機関より種々御配慮をいただき、厚くお礼申し上げます。

昭和56年 3 月

和歌山県教育委員会

教育長 高 橋 正 司

# 例 言

1. 本書は、建設省近畿地方建設局より委託を受けて実施した昭和55年度船岡山遺跡発掘調査の概要報告である。
2. 発掘調査に要した経費20,000千円は、すべて建設省近畿地方建設局が負担した。
3. 発掘調査は、和歌山県教育委員会の指導のもとに社団法人和歌山県文化財研究会が和歌山県より委託を受け事業を実施した。
4. 発掘調査は、和歌山県文化財保護審議会 羯磨正信、巽 三郎、都出比呂志、藤澤一夫の各委員の指導を受け、和歌山県教育委員会文化財課技師松田正昭、社団法人和歌山県文化財研究会技術員土井孝之を担当者として実施した。
5. 発掘調査遺構に関し、奈良大学文学部助教授水野正好、奈良県立民俗博物館主任学芸員奥野義雄の両氏から指導・助言を得た。
6. 出土遺物の整理・図面作成にあたって奈良大学学生中村憲代嬢の協力を得た。
7. 本書は調査を担当した土井が執筆・編集した。
8. 本発掘調査事業の調査組織は次のとおりである。

## 和歌山県文化財保護審議会

委 員 羯磨 正信	委 員 巽 三郎
委 員 都出比呂志	委 員 藤澤 一夫

## 和歌山県教育委員会事務局

教 育 長 高橋 正司  
教 育 次 長 三宅 秀彦（兼、社団法人和歌山県文化財研究会常務理事）

## 文化財課

課 長 井上 至（	〃	〃
主 幹 山田 義男（	〃	事務局次長）
文 化 財 第二係長 桃野 真晃（	〃	幹 事）
技 師 松田 正昭（	〃	技術員）
主 事 宮本登志夫（	〃	書 記）

## 社団法人和歌山県文化財研究会事務局

事務局長 海野 正幸  
技 術 員 土井 孝之  
書 記 中橋佐知子  
嘱 託 中前 久美

# 目 次

序 文

例 言

1. 遺跡の立地	1
2. 調査の概要	2
(1) 竪穴住居跡	2
(2) 土壙	5
(3) 落込み状地形	6
(4) 出土遺物	7
(5) その他の遺構・遺物	11
2. まとめ	12

## 挿図目次

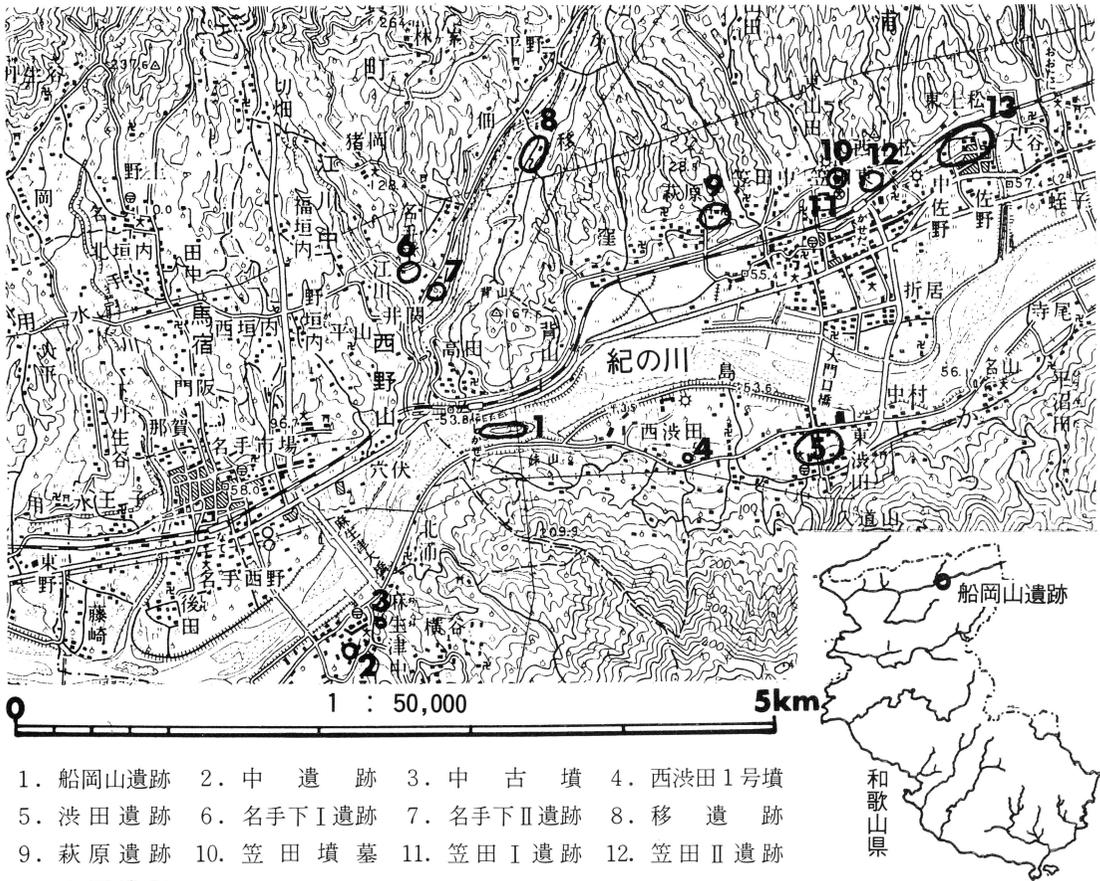
第1図 船岡山遺跡位置図	1	第8図 包含層出土遺物実測図2	10
第2図 S B 01平面実測図	3	第9図 中世土壙出土遺物実測図	10
第3図 S B 04平面実測図	4	第10図 包含層出土遺物実測図3	11
第4図 S K 241平面実測図	5	第11図 包含層出土鉄鎌実測図	11
第5図 S X 2平面実測図	6	第12図 船岡山遺跡全体図	
第6図 竪穴住居跡出土遺物実測図	7	第13図 調査区全体図1	
第7図 包含層出土遺物実測図1	9	第14図 調査区全体図2	

## 図版目次

図版1 (1)調査地区全景	(2)第I区全景
図版2 (1)第II区上面全景	(2)第II区下面全景
図版3 (1)第III区上面全景	(2)III区下面全景
図版4 (1)S B 01完掘状況	(2)S B 01の変遷・炉・遺物出土状況
図版5 (1)S B 02遺物出土状況	(2)S B 03遺物出土状況
図版6 (1)S B 05遺物出土状況	(2)S B 06遺物出土状況
図版7 (1)S B 04完掘状況	(2)S B 04焼失状況・S K 241・S K 37・S B 106
図版8 (1)中世土壙群	(2)S X 2・S X 6・S K 92・S K 61
図版9 出土遺物	
図版10 出土遺物	
図版11 出土遺物	
図版12 出土遺物	

# 1. 遺跡の立地

船岡山遺跡は伊都郡かつらぎ町大字島に所在する遺跡である。大台ヶ原山系に源を発する吉野川が緩やかな蛇行を繰り返し和歌山県に入ると紀の川と名称を改め、更に西流し紀伊水道へ注ぎ込む。紀の川は岩盤変動によって生じた中央構造線の地溝に沿って流れ、所々で岩盤露頭の河岸段丘を形成している。往時の人々がそうした河岸段丘上を生活の場として選択した数多くの遺跡が点在している。吉野川水系では弥生時代中期を主体とする奈良県吉野町・宮滝遺跡、五条市・原遺跡・野原遺跡・中遺跡があり、紀の川水系では弥生時代中・後期を主体とする橋本市・血繩遺跡、前・中期を主体とする打田町・堂坂遺跡がある。洪積台地上には弥生時代後期・古墳時代前期を主体とする橋本市・市脇遺跡があり、下流域に近づくにつれ緩やかな河岸段丘に変化し、かつらぎ町・佐野遺跡、打田町・東田中神社遺跡、岩出町・岡田遺跡が点在する。その中で船岡山遺跡は、地形の制約により紀の川の流れが狭くなるかつらぎ町と那賀町との境界付近の河中に所在し、周辺地形から推して往時南岸の妹山と地続きであったことを窺わせる。当遺跡周辺の弥生時代遺跡として、関連深い佐野遺跡を始め、萩原遺跡、名手下Ⅰ・Ⅱ遺跡、移遺跡、洪田遺跡、中遺跡などが所在する。



第1図 船岡山遺跡 位置図

## 2. 調査の概要

本年度の調査範囲は、昭和54年度の試掘調査で確認した竪穴住居跡を含め島域の西部約 5,000㎡を対象として行った。遺跡全体の原点（EWO・NSO）より東はE、西はW、南はS、北はNを冠し、これに原点からの距離で地点を表示した。地区名は前年度に調査を行なった西端部約 500㎡の調査区の東隣からW270～240ラインを第Ⅰ区、W240～180ラインを第Ⅱ区、W180～120ラインを第Ⅲ区とした。調査の結果、弥生時代・古墳時代・中世の遺物包含層の範囲を確認すると共に、弥生時代後期前半の円形竪穴住居跡5棟、土壙、落込み状地形、古墳時代の方形竪穴住居跡1棟、中世以後の掘立柱建物跡2棟、ピット群、土壙、溝等を検出した。また、第Ⅲ区東半において縄文時代後期の遺物包含層を確認することができた。

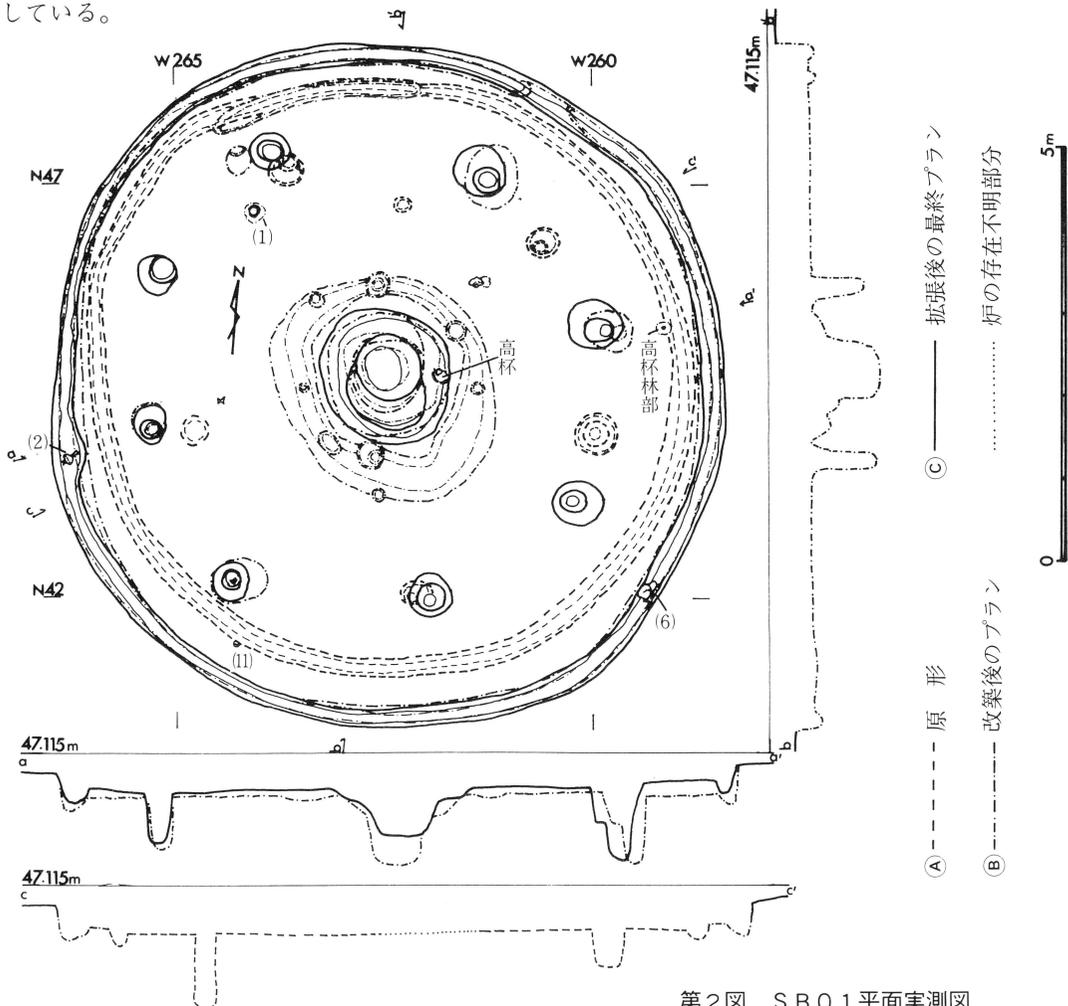
### （1）竪穴住居跡（図版4～7）

第Ⅰ区で2棟、第Ⅲ区で3棟、計5棟の円形住居跡と第Ⅲ区で方形住居跡を1棟検出した。各々SB01～SB06と呼称する。SB01は第Ⅰ区の北西側に位置し、直径約8.2mで拡張・改築と2度の建替えの見られる住居跡である。SB02はSB01の南東に位置し、直径約7.2mで一部後世の削平の見られる住居跡である。SB03は第Ⅱ区の落込み状地形の東側に位置し、直径6.8mの住居跡である。SB06はSB03の東側に位置し、直径約6mで後出する2基の土壙に切られている住居跡である。SB05は第Ⅲ区の東側に位置し、直径約8mの住居跡である。これらの円形住居跡は壁際の全周もしくは一部に壁溝を巡らし、支柱穴は5～8本とまばらである。また、床面の中央には直径1m前後、深さ0.6m前後の炉が設けられ、周りに炉堤を巡らすもの（SB01、SB05、SB06）、巡らさないもの（SB02、SB03）があり、SB02を除く4棟の炉内に1～2層の炭層が認められた。床面はSB01、SB03、SB05の全面、SB06の一部が堅く踏みしめられており、SB03、SB05は床面に貼り床を施し短期間の内に継続して使用されているようである。5棟とも覆土の堆積状況からみて、廃棄された後に自然埋没したものと考えられる。床面直上の出土遺物より、円形住居跡5棟は弥生時代後期前半のもので、方形住居跡は火災に会うと共に出土遺物が少ないものの、平面形、包含層出土遺物との対比等から古墳時代前期にあてることができる。

#### SB01（図版4）

SB01は同心円拡張と上屋構造の改築が見られる住居跡である。原形（Ⓐ）規模は、直径約7.1mを測る円形の住居跡である。壁高は後出する拡張後の住居跡（Ⓑ）掘削のため定かでないが、拡張後（Ⓑ）の床面との段差は約4～8cm低い床面となる。壁際に沿って幅約20cm、深さ約5～10cmの壁溝が巡らされている。本来、床面の中央に凹み状の炉施設があり拡張の際に破壊されたものと考えられる。支柱穴は5本で、いずれも直径約25～45cm、深さ約40～85cmの掘り方を持ち、直径約15～20cmの柱当りをもつものである。床面は壁際を除いて非常に堅く踏みしめられていた。拡張後のSB01（Ⓑ）の規模は、長径約8.2m、短径約7.9mを測るほぼ円形の住居跡である。壁高は約

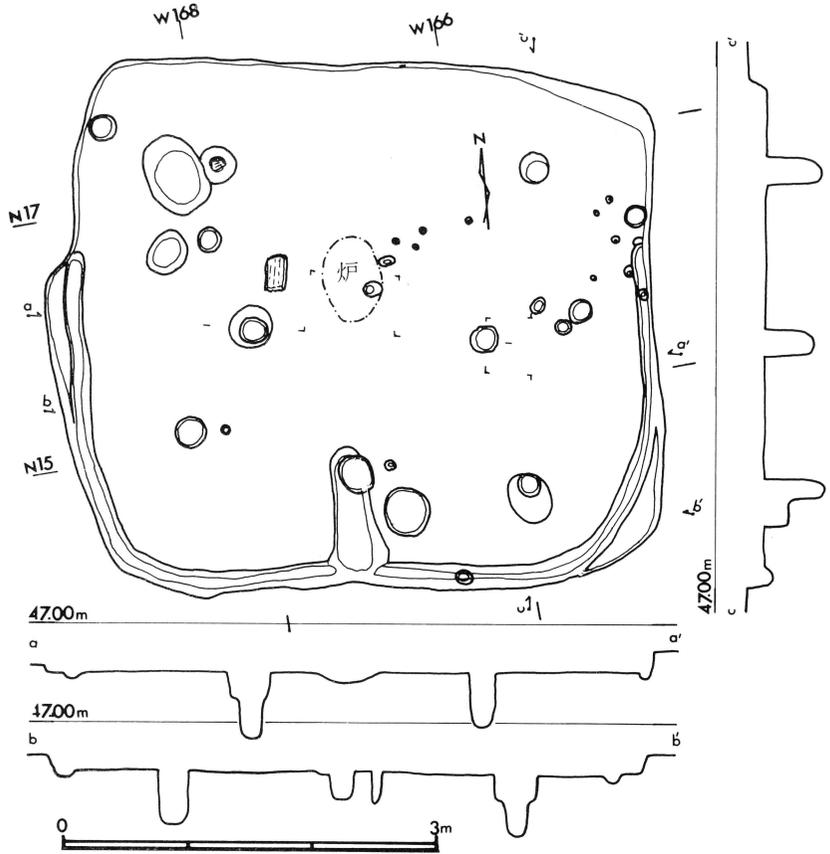
30~40cmで、壁際に沿って幅約20~30cm、深さ約10cmの壁溝が巡らされている。壁溝は床面の北東域において約40cmの間一部存在しない。何らかの付随施設が考えられる。床面のほぼ中央に直径約1.6m、深さ約0.8mの二段掘りの炉が設けられ、周囲には幅約40~60cm、深さ約5cmの浅い凹みが巡っている。凹みは焼土・炭化物混入土で堅くしまった状態であった。支柱穴は8本で、いずれも直径約40~60cm、深さ約60~90cmの掘り方をもち、直径20cm内外の柱当りをもつものである。また、炉の南北際に各1本ずつの柱穴をもち、支柱穴が2本追加された上屋構造となる。床面において、広口壺口縁部(1)、高杯杯部が伏せられた状態で出土した。S B 01の最終形となる改築後(©)の規模は、改築前の住居跡(ⓑ)と殆んど変わらず、僅かに支柱穴の位置が変わるのと、炉の構造が簡略化されたにとどまるものである。床面は改築前に比べ約5~10cm高くなる。壁高は約20~30cmで、壁際に沿って幅約15~20cm、深さ約15cmの壁溝が巡らされている。幅約25cmに広げられた2ヶ所において把手付鉢(6)・台付細頸壺(2)、床面において甑(11)、石鏝(17)が出土した。床面の中央には改築前の炉底に黄色土を投入し、再度炭層を形成させた炉があり、炉肩より高杯(図版4-(2)-④)が出土している。



第2図 SB01平面実測図

SB04 (図版7—(1)・(2)—①)

SB04の平面規模は東西約4.8m、南北約4.2mを測り東西にやや長い方形住居跡である。西側を除いて壁高の残りは約20cmあり、壁際南半部に幅約20cm、深さ約10cmの壁溝が巡らされている。床面のほぼ中央北寄りには長軸約60cm、短軸約40cm、深さ約10cmの階円形状の炉跡があり、焼土が堅く堆積していた。また床面の南側中央には、長軸約1m、短軸約0.4m、深さ約10cmの縦長の土壇があり、性格等は不明である。主柱穴は4本となり、いずれも直径約20～



第3図 SB04平面実測図

30cm、深さ約50cmの掘り方をもつ。炉際東西に同規模の柱穴が2本あり、これら6本の柱によって上屋構造が支えられていたものである。SB04は、床一面に炭化材・焼土がみられ、堆積覆土が堅くしまっていることなどから単一時期による埋没が考えられる。また、SB04が焼失したため廃棄されたものか、廃棄された後焼失したものか定かでない。床面出土の遺物は限られたもので、小型丸底壺の破片、外面に細かいハケ目調整、内面に丁寧なへら削り調整を施した甕頸部の破片が出土しているに過ぎず図示できるものではなかった。

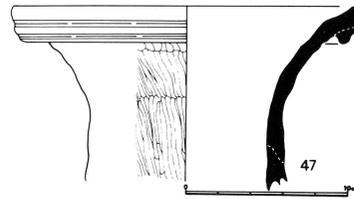
(2) 土 壇  
弥生時代

弥生時代の土壇は遺構の切り合い関係、包含層の上下関係によって分類することができる。①円形竪穴住居が営まれていた時期の野外炉(SK235)、長軸2m前後で舟底形の掘り方をもつ土壇〔SK29、SK37(図版7—(2)—③)等〕。②住居埋没後余り時間幅をもたない土壇〔SK240・SK241・SK242等〕の2分類することができる。出土遺物の整理・堆積覆土の状況、集落内での位置関係等より時期・性格を検討するものである。

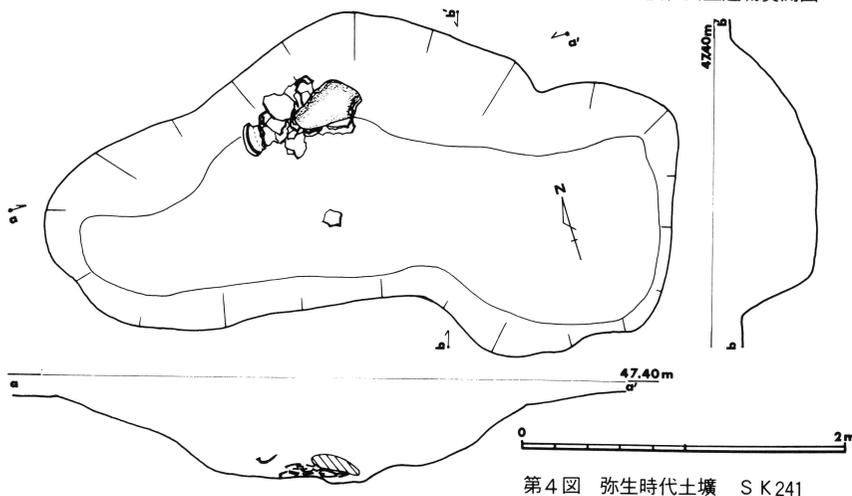
S K 2 4 1 (図版7-(2)-②)

S B 06北半の覆土を切り込んで作られている。平面形の東側一部でくびれるが、土層観察より切り合いはないものとみられる。平面規模は東西約 3.9m、南北約 1.8mを測り、深さ約 0.6mで北側の緩やかな傾斜を除いて三方は急な傾斜をもって基底部に達する。土壌の北寄り基底部に弥生時代後期の広口壺(47)が横たえられ、その上に人頭大の川原石が置かれた状態で検出されている。壺の置かれた位置は一部凹地を呈している。遺物の出土状況等からみて土壙墓と考えたい。堆積覆土の状況は地山土に近似し軟弱であるが、人為的な埋め戻しではなく、4層の自然堆積層から成る。最下層の第4層では若干遺物量も多くなり人為的な埋め戻しの可能性がある。

S K 241を含めS K 240・S K 242の堆積覆土は同一のもので、同時期の造営・埋没が考えられる。土壙墓として、住居設営との時期差、居住域と区画・境界を有するかどうかの点について今後の同類遺構の検出を待つて再考したい。



S K 241 出土遺物実測図



第4図 弥生時代土壙 S K 241

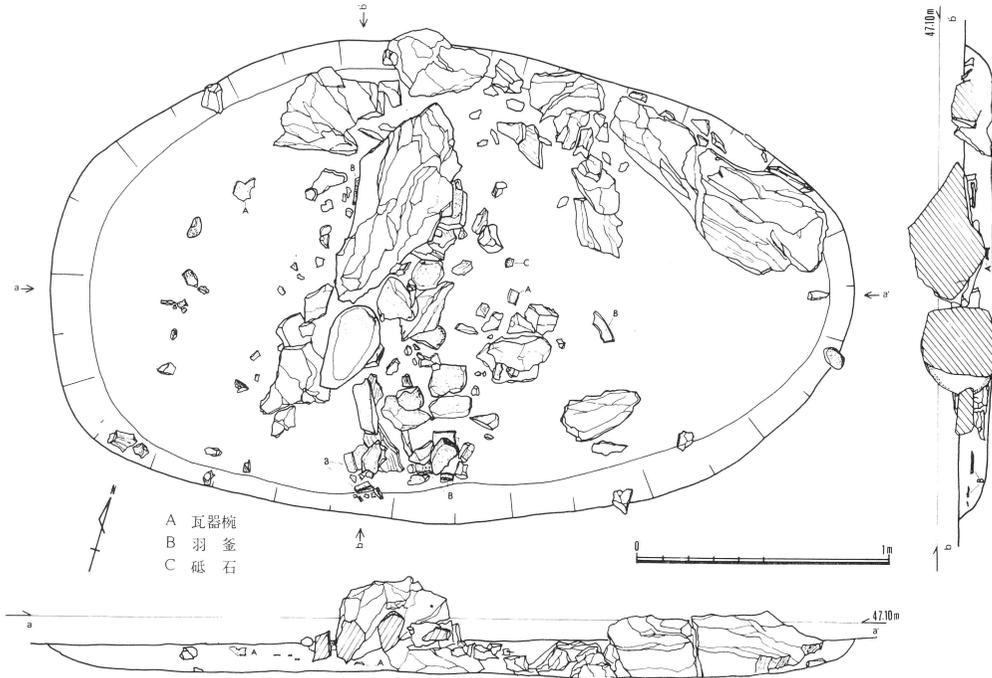
中世以後 (図版8)

中世以後の土壙はN34 W194にある露頭の大岩を意識するかのよう集中している。土壙は出土遺物・覆土の状況などによって分類することができる。ここでは、①中世遺物を含み、覆土に多量の炭粒が混入している土壙 (S X 1～S X 8、S K 33、S K 40)、②遺物は含まないが、覆土が①と同一の土壙 (S K 47、S K 48)、③焼土粒 (塊) を多量に含む土壙 (S K 61、S K 62、S K 72、S K 75、S K 122～124)、④掘り方の基底部分で長方形を呈し、基底部分まで小礫をつめ込んだ土壙 (S K 80、S K 81、S K 92、S K 119)、⑤大形の土壙で、厚さ約10～20cmの炭層と約2～3cmの焼土層で形成されている土壙 (S K 112～S K 115) の5分類することができる。①②は出土遺物等より鎌倉時代末から室町時代初頭の時期の土壙で、火葬墓としての性格を強く示唆する。③④は出土遺物が皆無で時期の決め手を欠くこと、⑤は木材の焼成を目的としたものか、何らかの焼成、埋葬を

目的としたものか、性格等について検討を要する土壌である。

### S X 2 (図版7-(2)-①)

大岩の南西際にあり、中世土壌として最大の規模、東西約 3.1m、南北約 1.8m、深さ約 0.1mを測るものである。土壌の南北中軸線上に人頭大から挙大の川原石・結晶片岩が集中している。遺物の出土状況は石の間に挟まれたもの、掘り方基底部のもの、覆土中に含まれた状態のものと軸線上に集中する。出土遺物は瓦器椀・羽釜・土師小皿・砥石があり、土器3種がセット関係になるものと考えられる。また、出土遺物からS X 2以外の土壌との前後関係が把握できる。



第5図 中世土壌 S X 2 平面実測図

### (3) 落込み状地形 (図版2-(2))

第I区から第II区にかけて、長さ約90m、幅約11m、深さ約1.5mの凹地状の地形がみられる。層序は表土・黄色砂質土(礫混入)、淡黄褐色粘質土(中世遺物包含層)、黄灰色弱粘質土(弥生時代遺物包含層I)、暗茶褐色弱粘質土(弥生時代遺物包含層II)、黄色土(地山)の6層よりなる。中世遺物の包含は第II区に集中し、弥生時代遺物の包含は弥生IではW220~240付近に、弥生IIではW180~200付近に集中する。W220~240の遺物はS B 01、S B 02からの廃棄が考えられる。

### (4) 出土遺物 (図版9~12)

弥生時代遺物の出土量が圧倒的に多く、土器・石器・鉄器等の遺物が出土している。その他縄文時代後期、古墳時代、中世から近世までの遺物が断続的に見られる。

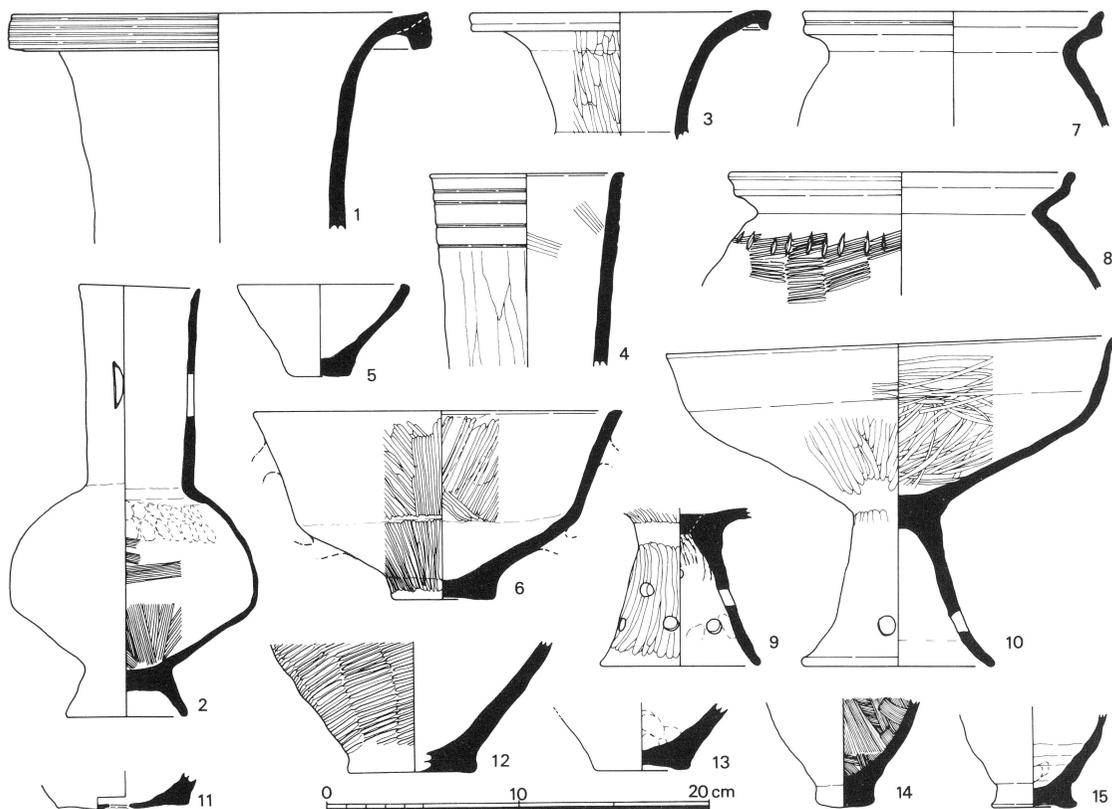
縄文時代後期一第III区東南部に集中し、縄文土器の深鉢・器種不明の破片が出土している。

弥生時代後期一調査地区のほぼ全域から、壺・甕・高杯・鉢・甑・器台・手捏ね土器、ミニチュ

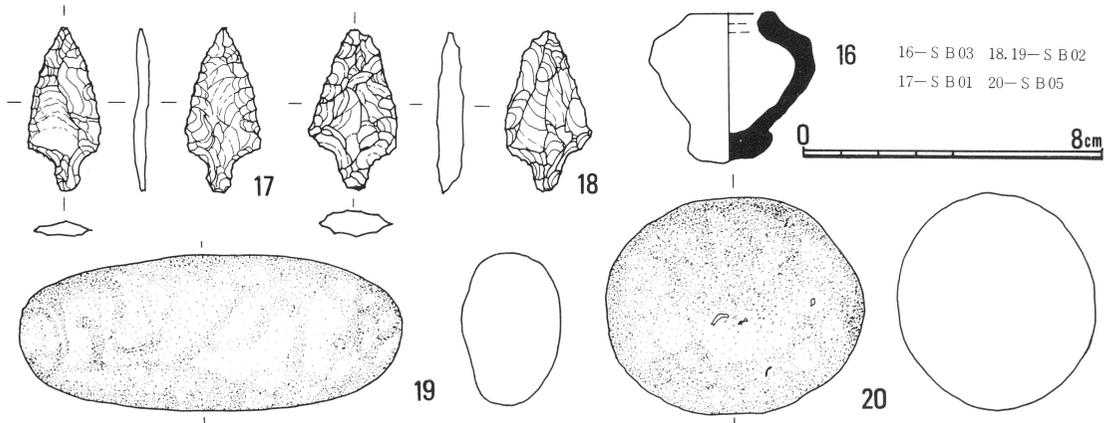
ア土器・紡垂車等の弥生土器、少量の石庖丁・石鏃・砥石・叩き石・投弾等の石器類、小鉄斧・鉈・鉄鏃等の鉄器類が出土している。

古墳時代一袋状無肩式鉄斧(46)、平根式鉄鏃(45)、刀子状鉄器等の鉄器類、土師器とみられる小破片の土器が出土している。

中世一瓦器椀・羽釜・土師小皿・瓦器小皿・須恵質捏ね鉢・土鍾・陶磁器等の土器類、鉄鏃・鉄釘・用途不明鉄器等の鉄器類が出土している。



1. 2. 5. 6. 7. 11. - S B 0 1    10. 12 - S B 0 3    3. 4. 8. 9. 13. 15 - S B 0 5    14 - S B 0 6



16 - S B 0 3    18. 19 - S B 0 2  
17 - S B 0 1    20 - S B 0 5

第6図 竪穴住居跡出土遺物実測図

近世一陶磁器・硯・寛永通宝・鉄器等が出土している。

## 弥生土器

弥生時代後期前半の時期にみられる殆どどの器種が出土している。色調は紀北特有の淡桃褐色のものから、淡黄褐色・淡赤褐色・暗黄褐色などの数種類が認められる。特に淡赤褐色を呈する土器は、丁寧なヘラ磨きを施した壺・高杯にみられ、非常に緻密で砂粒の少ないものである。また、器種により色調・胎土の相違が顕著に認められる。他に生駒西麓産の破片が数点出土している。

**壺**（1～4・21～27・47）一口縁部が漏斗状に開き端部が肉厚のもの（1・24）、端部が小振りなもの（3・26）、端部に軽いナデを施し面をもつもの(2)、頸部がやや垂直に立ち上り端部が短く垂下し肉厚のもの（21・23）、外面ハケ調整を施した壺(27)も（21・23）同様の口縁部をもつものと考えられる。(24)は内外面に丁寧なヘラ磨きが施され、口縁垂下面に凹線文3条を巡らした後、縦方向のヘラ描き10多が施されている。小型広口壺(26)は胴部が張り出し、口縁垂下部、胴部上半に楡描文を施し、器面は丁寧なヘラ磨き調整が施されている。中期末の形態・技法の残る壺である。長頸壺(25)は外面に細かいハケ調整、内面に粗いハケ調整、頸部と胴部の接合部は顕著な指頭圧痕が認められる。長頸壺(4)は外面に幅の広いヘラ磨き調整、内面に粗いハケ調整が施されており、口縁部上半に浅い4条の凹線文がみられる。脚付細頸壺(2)は外面全体に丁寧なヘラ磨き調整、内面に粗いハケ調整が施され、頸部中位に焼成後の穿孔がみられる。

**甕**（7・8・12・28～30）一胎土はやや粗く小砂粒を多量に含み、色調は淡茶褐色・淡黄褐色・暗茶褐色を呈する。口縁部の形態により3種に分類できる。①口縁部が「く」の字形に外反し端部が丸くおさまるもの(28)、②端部を上方もしくは斜め外方へつまみ出し受け口状を呈するもの（7・8・29）、③端部を上下につまみ出し面をもつもの(30)である。3種ともタタキ方向は左下りが圧倒的に多く、粗いタタキが目立つ。

**高杯**（9・10・31～33）一形態により3種に分類できる。①頸部が比較的細く、杯口縁部が斜め外方へ立ち上り端部の丸くおさまるもの（10・32）、②脚部が短く、杯部は椀状に緩やかに立ち上り、端部に強いナデ調整が施されているもの(31)、③脚部と杯部を連続して作りあげていくもの(33)がある。殆どの場合、脚部と杯部を分割し接合部に上方から円板を充填している。

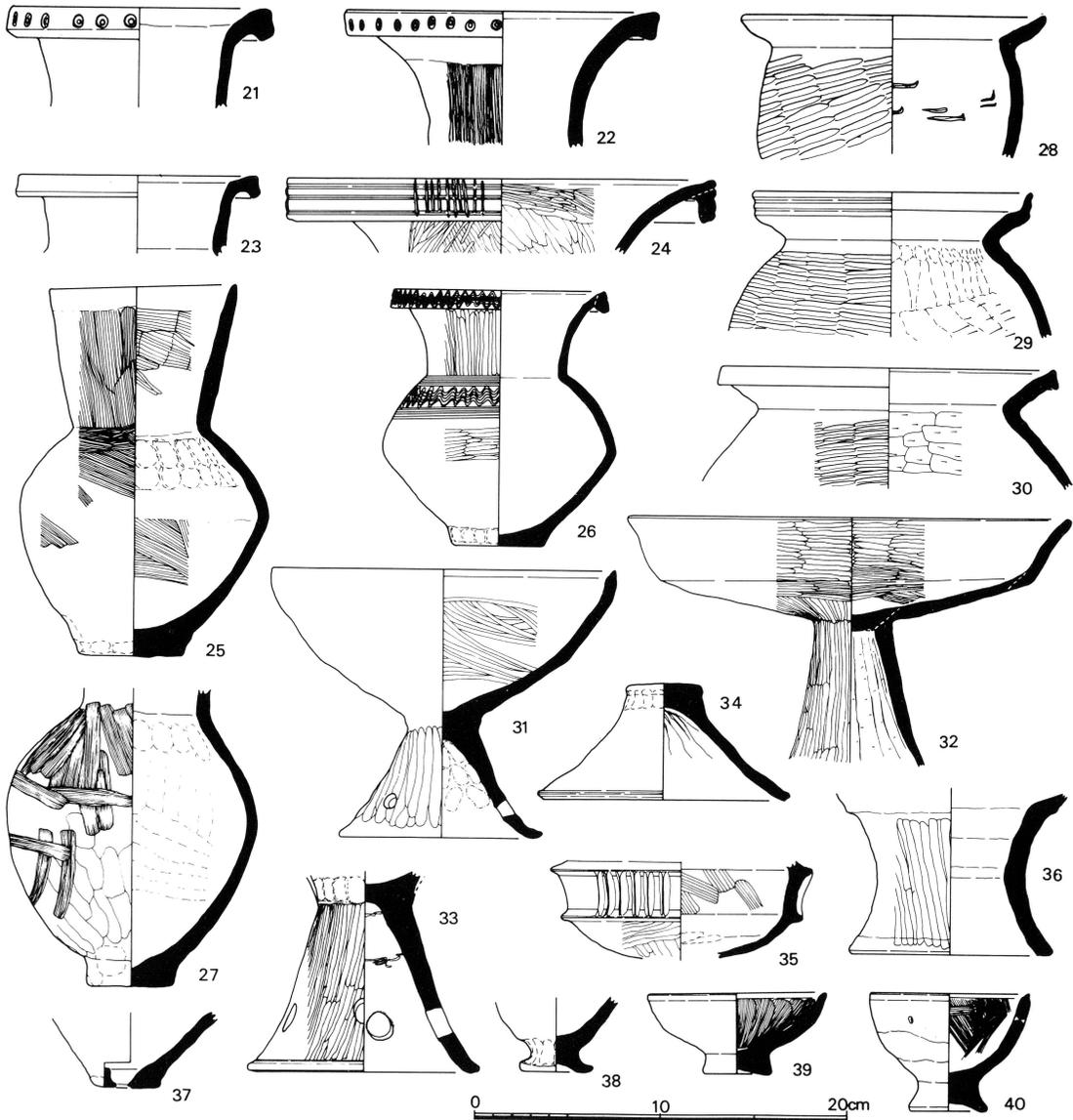
**鉢**（5・6・35・38～40）一把手付鉢(6)は黄褐色を呈し、非常に緻密で砂粒を殆ど含まない胎土である。底部を除く内外面に丁寧なヘラ磨き調整が施されており、左右対象に縦位置の把手がつく。小鉢(5)は摩滅が著しいため調整は不明である。小型鉢（38～40）は上げ底状の底部を有し、胴部外面は粗いヘラ磨き調整・内面は細かいハケ調整が施されている。（39・40）は暗黄褐色を呈し、比較的緻密な胎土である。(35)は淡黄褐色を呈し、非常に緻密な胎土で、外面に幅の広いヘラ磨き調整、内面に粗いハケ調整が施されている。口縁の立ち上り部には6条を単位とする棒状貼付浮文がある。

その他、壺の底部（13・14）、甕の底部(15)、甗(34)、器台(36)、ミニチュア土器（16・64）がある。

石 器

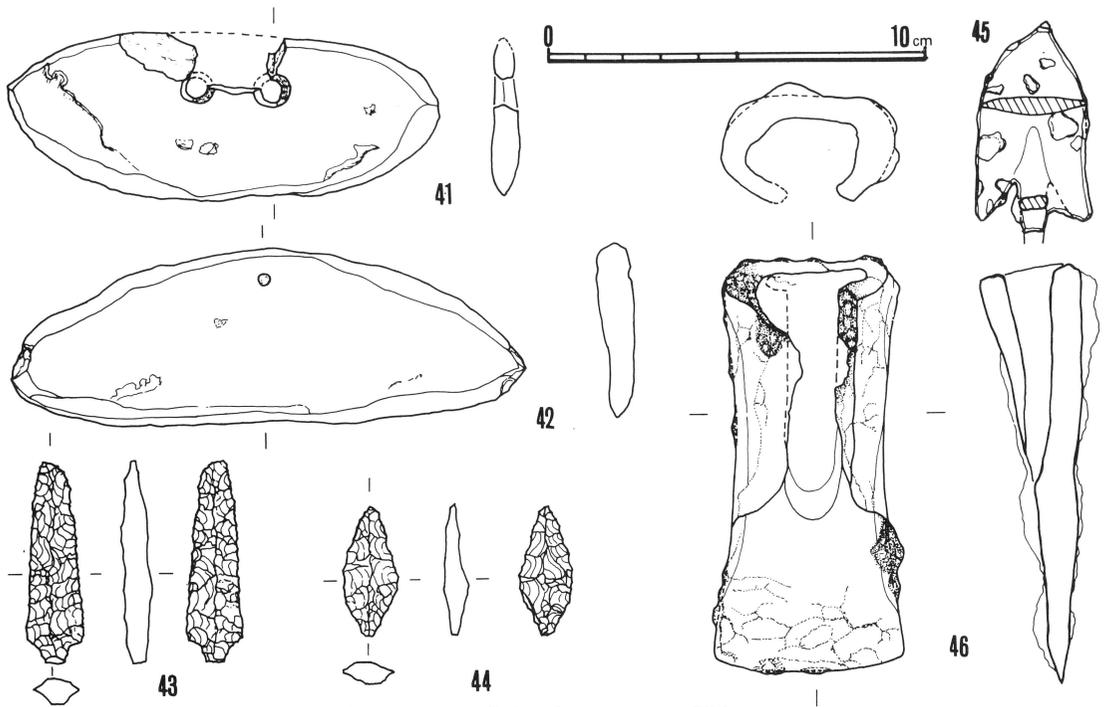
石鏃 (17・18・43・44) 一いずれも暗灰色を呈するサヌカイトを石材としており、風化・摩滅度の少ないキメの細かいものである。全て凸基無茎式(44)、もしくは凸基有茎式 (17・18・43) の打製石鏃である。(44)は、凸基の部分が尖基状を呈し、幅の最も広い部分が基端にかたよる形状の鏃である。

石庖丁 (41・42) 一計4点のみの出土である。図示したものは、濃青灰色～淡青緑色を呈する結晶片岩を石材としている。(41)は刃部・背部共に弧形をなす両刃のものである。(42)は刃部は直線形をなし、背部は弧形をなす片刃のもので背寄りの両面に未貫通の穿孔痕がみられる。いずれも刃部に



24-弥生 I 22. 25. 27. 28. 30. 33. 36. 37-弥生 I 下 23. 26. 29. 31. 32. 34. 35. 38.  
39-弥生 II 40-S K 44

第7図 包含層出土遺物実測図1



41. 42. 43—弥生 I 44—弥生 I 下 46—弥生 I 上 45—S B 05覆土

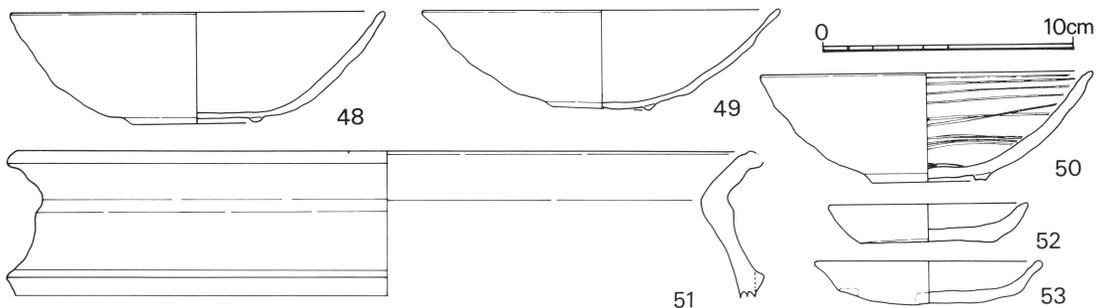
第8図 包含層出土遺物 実測図2

使用の際に生じた摩滅痕がみられる。

**叩き石** (19・20) —いずれもキメの細かい砂岩系の石を石材としており、一端に使用の際に生じた摩滅痕が認められる。各住居跡出土の作業台（人頭大の川原石・結晶片岩）とセットとして使用されていたものであろう。(20)は球体の大半にススが薄く付着している。

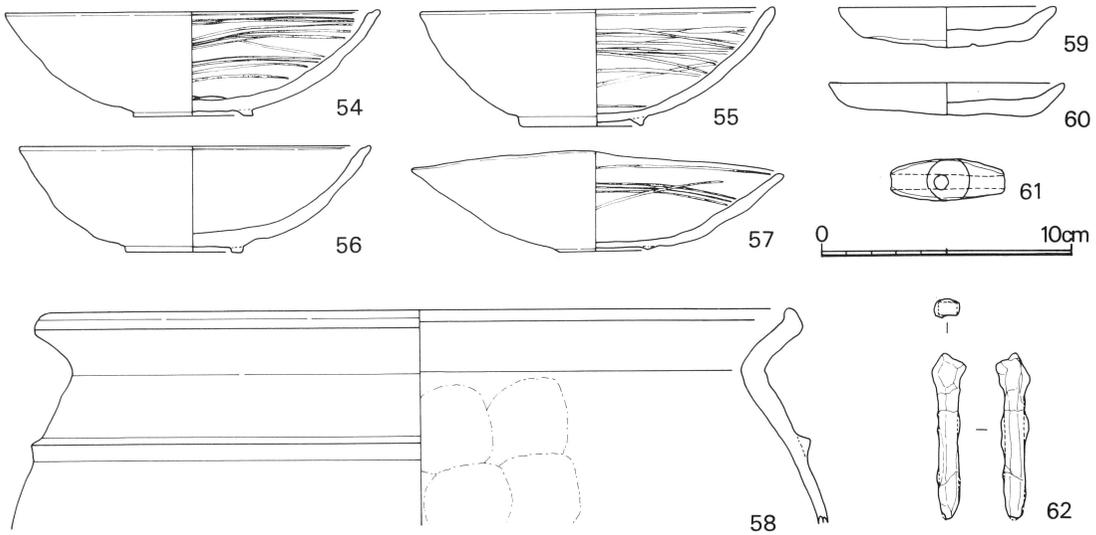
### 中世土器

出土遺物の中で、瓦器碗（50・54～56）は器壁が厚く、貼り付け高台部が台形状を呈し、口縁端部内面に沈線を施している。この瓦器碗に伴出する遺物は明確でないが、形態上(59)の瓦器小皿、(52)の土師小皿が伴うものと考えられる。これらの土器に後出する形態として、器壁が薄く、貼り付け高台部が消失する過程でみられるような逆三角形を呈し、口縁端部内面に沈線を施さない瓦器碗（48・49・57）と、比較的器壁が薄く口縁部の立ち上りが緩く外傾しながら端部が丸くおさまる土師



51—S X 2 52—S X 4 48. 49. 53—S X 6 50—S K 40

第9図 中世土壙出土遺物 実測図



第10図 包含層出土遺物 実測図3

小皿と、図示できなかつたが(51)と同様の羽釜が共伴するものである。前者の瓦器碗は指押え成形後に丁寧なへら磨き調整を施し、見込みの部分に簡単なループ状の暗文を施している。胎土の小砂粒は極めて少なく、全体に整った瓦器碗である。後者は摩滅の著しい土器で、雑な成形を行い、胎土の小砂粒も前者に比べて多くなる。このような形態・技法の違いは、製作者・時期の違いと考えることができる。その他、土師小皿(52)は底部糸切り調整を施している。土錘(61)は既述の中世土器に伴って出土するものである。

#### (5) その他の遺構・遺物

**S B 106** (図版7-②-④) **S B 110**—第Ⅱ区で掘立柱建物跡として検出できた遺構である。いずれの柱穴も他の不揃いのピットと同様に直径約20~25cm、深さ約40~50cmの大きさのもので、掘り方は検出できなかった。S B 106は南北3間(約4.5m)×東西2間(約2.7m)の規模で、柱間の長さはやや不揃いになる。S B 110も南北3間(約4.2m)×東西2間(約3m)の規模と考えられ、柱間の長さはほぼ一定している。

**A 遺構** (方形周溝遺構)—第Ⅲ区のN15W158にある一辺約4mで幅約60cm、深さ約10cmの小溝が方形にまわる遺構である。小溝の内側にピットが7穴存在するが当遺構と関係のないものである。また、ほぼ中央に隋円形の土壇2基を検出したが、いずれも覆土に炭化材小片を含むもので遺物等は皆無に等しい。方形周溝墓と呼び難い遺構である。

**S K 29・S K 37** (図版7-②-③)—同様の土壇が第Ⅱ区の南半に6基集中しており、いずれも長軸2m前後、短軸0.8m前後、深さ0.3m前後の規模を有し、全て舟底形の掘り方をもつ土壇である。S K 37の基底部分で若干の弥生土器を検出したが、他は小片のみで性格等の決め手を欠くものである。

**遺物**—第Ⅰ区の中世遺物包含層から6C初頭の須恵器杯身の破片が出土している。第Ⅱ区を中心

に陶磁器類が出土しており、国産では有田焼の磁器、唐津焼、輸入品では龍泉窯の青磁碗、同安窯の青磁碗、白磁皿、朝鮮製の青磁片等の資料を得ることができた。鉄鏃(63)は中世遺物包含層から出土したものである。

### 3. ま と め

船岡山遺跡は、昭和54年度の試掘調査によって島域平坦部のほぼ全域で弥生時代の遺物包含層が確認された。そのほか中世以後の遺構・遺物の存在も明らかにされた。本年度は、試掘調査の成果をうけて調査対象域の全面発掘調査を開始した。その結果、当初予測したよりも遺構・遺物の存在密度が高く、また残存状況の極めて良好な円型竪穴住居跡、土壇群・ピット群を検出し得た。

弥生時代の各住居跡からは後期前半の土器が出土しており、壺・甕・高杯などの器種構成が認められる。また同時期の遺物が、黄灰色弱粘質土と暗茶褐色弱粘質土の遺物包含層より多量に出土しており、後期前半に見られる殆どの器種が認められると共に、近接する佐野遺跡出土の弥生土器と類似するものも見受けられる。これらの土器の中には、弥生時代中期後半の壺にみられる胴部の張り出す形態、高杯の杯部の接合部にみられる円板充填技法が、また、後期後半の広口壺にみられる口縁端の垂下部が逆三角形を呈する形態などが認められる。この事から、船岡山の弥生時代集落の成立・繁栄・衰退の時期を、後期前半を中心とした時期におく事ができる。他に、生駒西麓産の土器片が数点出土しており、本遺跡も紀の川及び吉野川を媒介とした弥生土器の移動が考えられる。

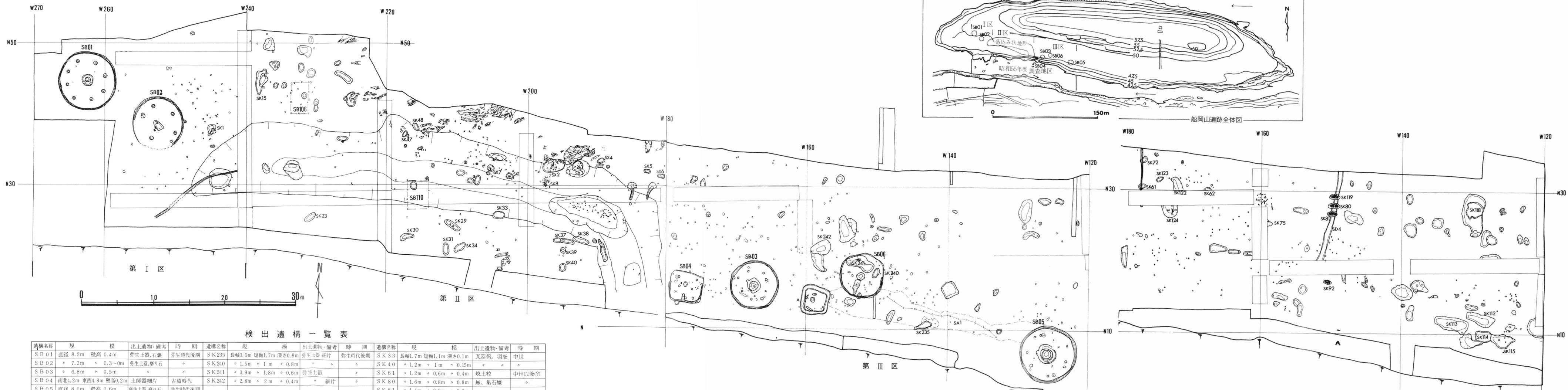
S B 01、S B 02からの廃棄と考えられる遺物の他に、他地点に比べて出土量が多くなる第Ⅱ区W 200～220北部、第Ⅲ区W120～140北端部の遺物がある。これらは、W150ラインの北傾斜面で確認した遺物包含層をも含め、島域頂上の平坦地にも後期前半の遺構の存在を強く示唆するものであり、島という限られた立地の中で、上下の平坦地における居住の差異、機能の相違があるのかどうか考えなければならない。

中世では、S X 2・6より出土した土器から瓦器碗・羽釜・小皿の器種構成が認められ、これらの土器形態の変化により一部の中世土壇の時期的な変遷を追うことができるものとなった。中世遺物包含層からは少量の陶磁器類も出土しているが、土壇からは瓦器碗などの日常雑器類しか出土しないことは当時、土壇や他の中世遺構を遺した人々の生活形態に密接な関係をもつものであろう。また、中世遺物包含層下部からは古墳時代の鉄器類が出土しており、S B 04以外の遺構の存在を窺わせる。現在、出土遺物の大半が未整理のため古墳時代の土器類の検討は今後の課題である。

船岡山遺跡が島という限られた立地の中であって、弥生時代では、集落の機能、住居の配置構成、居住域と墓域との関係、集落と生産の場との関係等、中世では、土壇群や掘立柱建物等の配置構成など提起される問題は多岐にわたり、これらの問題を具体化する方向で来年度以降の調査に臨まねばならない。



第11図鉄鏃実測図



検出遺構一覧表

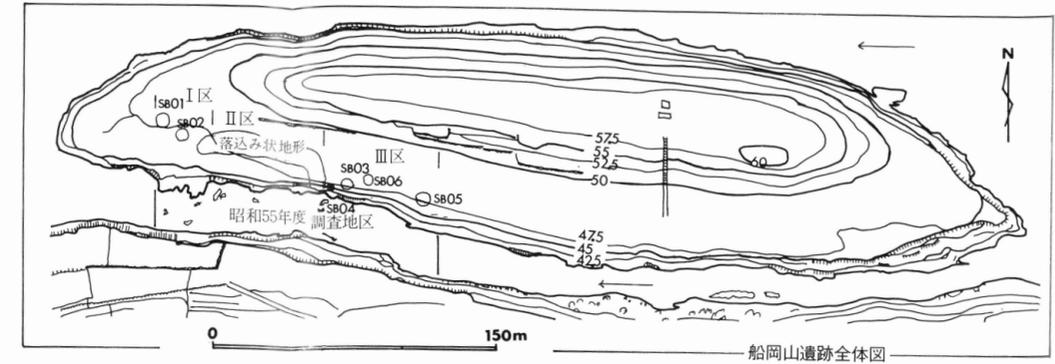
遺構名称	規模	出土遺物・備考	時期	遺構名称	規模	出土遺物・備考	時期	遺構名称	規模	出土遺物・備考	時期
SB 01	直径 8.2m 壁高 0.4m	弥生土器、石鏃	弥生時代後期	SK 235	長軸3.5m 短軸1.7m 深さ0.8m	弥生土器 細片	弥生時代後期	SK 33	長軸1.7m 短軸1.1m 深さ0.1m	瓦器碗、羽釜	中世
SB 02	〃 7.2m 〃 0.3~0m	弥生土器、磨り石	〃	SK 240	〃 1.5m 〃 1m 〃 0.8m	〃	〃	SK 40	〃 1.2m 〃 1m 〃 0.15m	〃	〃
SB 03	〃 6.8m 〃 0.5m	〃	〃	SK 241	〃 3.9m 〃 1.8m 〃 0.6m	弥生土器	〃	SK 61	〃 1.2m 〃 0.6m 〃 0.4m	焼土粒	中世以後(?)
SB 04	南北4.2m 東西4.8m 壁高0.2m	土師器細片	古墳時代	SK 242	〃 2.8m 〃 2m 〃 0.4m	〃 細片	〃	SK 80	〃 1.6m 〃 0.8m 〃 0.8m	無、集石塚	〃
SB 05	直径 8.0m 壁高 0.6m	弥生土器、磨り石	弥生時代後期					SK 81	〃 1.4m 〃 0.8m 〃 0.8m	〃	〃
SB 06	〃 6.0m 〃 0.7~0.1m	〃	〃	S X 1	長軸1.1m 短軸0.9m 深さ0.1m	無	中世(?)	SK 92	〃 1.1m 〃 0.36m 〃 0.6m	〃	〃
A	一辺約 4m 溝深 0.1m	土器細片	?	S X 2	〃 3.1m 〃 1.8m 〃 0.1m	瓦器碗、羽釜	中世	SK 112	〃 4.4m 〃 1.7m 〃 0.3m	焼土、炭のみ	〃
SB 106	2間×3間(2.7×4.5m)	〃	中世(?)	S X 3	〃 1.6m 〃 1.5m 〃 0.15m	〃	〃	SK 113	〃 4.9m 〃 1.9m 〃 0.4m	〃	〃
SB 110	〃 〃 (3×4.2m)	〃	〃	S X 4	〃 1.1m 〃 0.7m 〃 0.07m	焼土粒	中世(?)	SK 114	〃 2.1m 〃 1.4m 〃 0.15m	〃	〃
SK 1	長軸1.5m 短軸1.2m 深さ0.8m	弥生土器	弥生時代後期	SK 5	〃 1m 〃 0.7m 〃 0.05m	羽釜	中世	SK 115	〃 3.7m 〃 1.9m 〃 0.1m	〃	〃
SK 15	〃 3.5m 〃 1.7m 〃 0.5m	〃	〃	S X 6	〃 1m 〃 0.65m 〃 0.15m	瓦器碗、土師小皿	〃	SK 122	〃 2m 〃 1.3m 〃 0.45m	焼土粒	〃
SK 29	〃 2.5m 〃 0.9m 〃 0.2m	〃 細片	〃 (?)	S X 7	〃 1m 〃 0.9m 〃 0.1m	土器細片	中世(?)	SK 123	〃 1.2m 〃 0.6m 〃 0.2m	〃	〃
SK 37	〃 2.2m 〃 0.6m 〃 0.25m	〃	〃	S X 8	〃 1.7m 〃 1.1m 〃 0.1m	羽釜	中世	SK 124	〃 2.2m 〃 1.8m 〃 0.3m	〃	〃

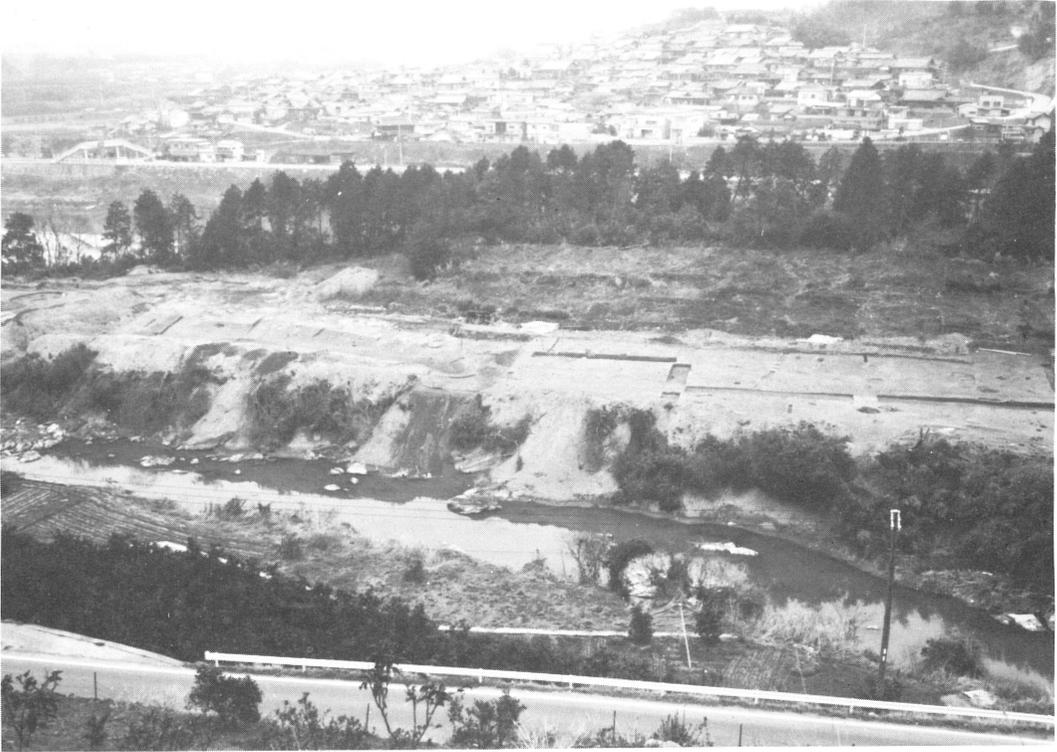
SB (住居跡、掘立柱建物跡) SK (土塚) SX (土塚墓) SD (溝) SA (柵列) A. 方形周溝遺構

第13図 調査区全体図1

第III区 上面

第14図 調査区全体図2

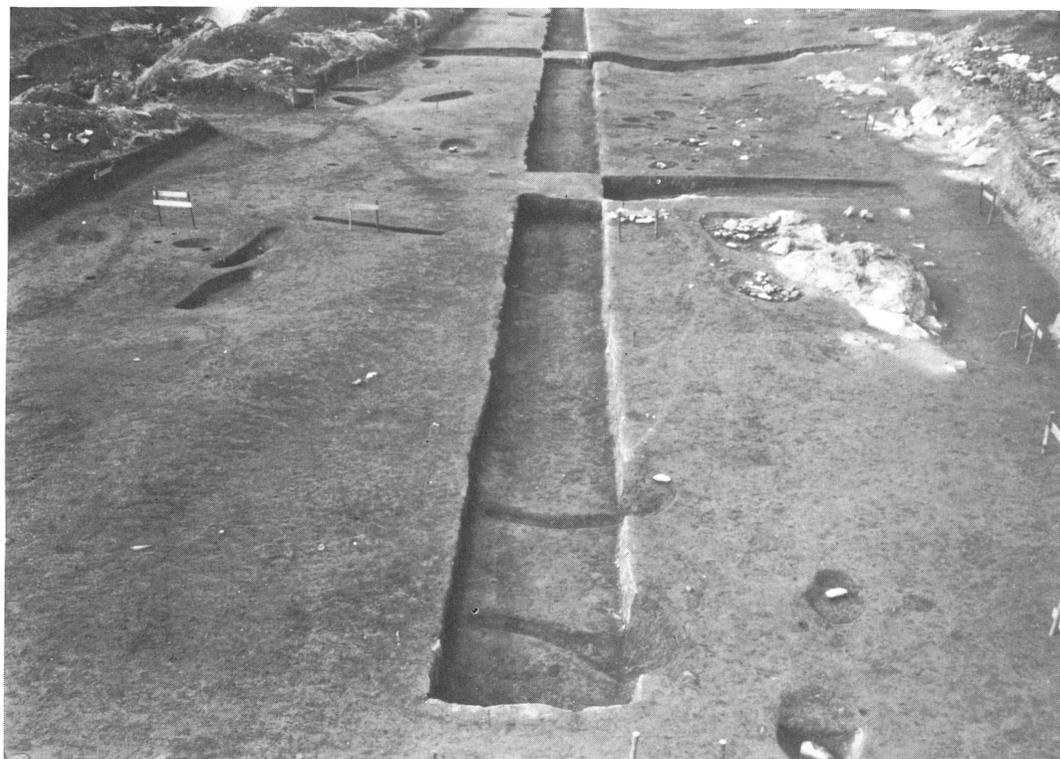




(1) 調査地区全景 (南より)



(2) 第I区 全景 (東より)



(1) 第Ⅱ区 上面全景 (東より)



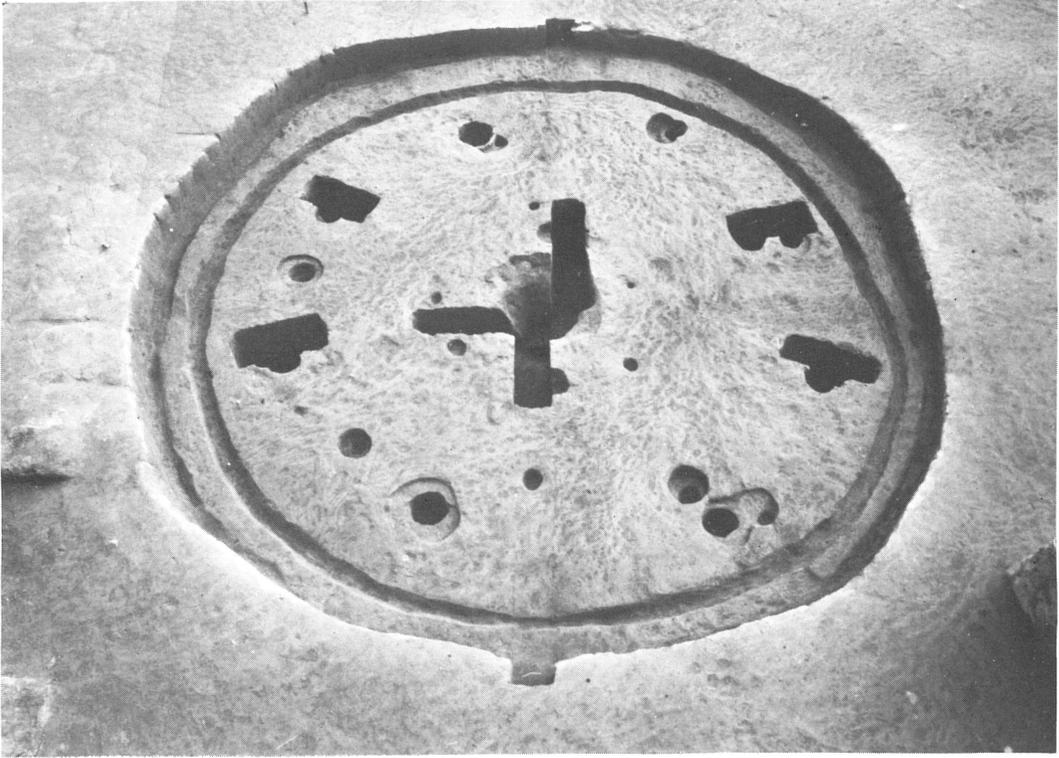
(2) 第Ⅱ区 下面全景 (東より)



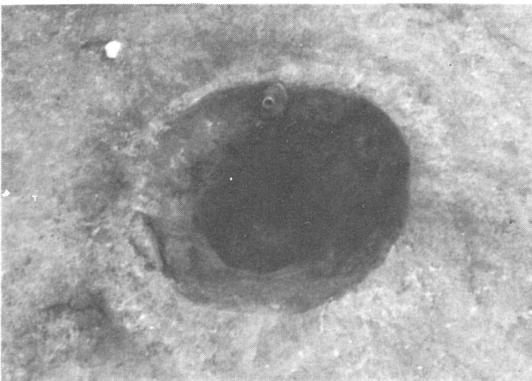
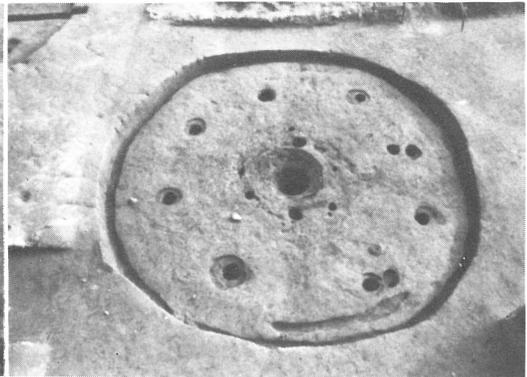
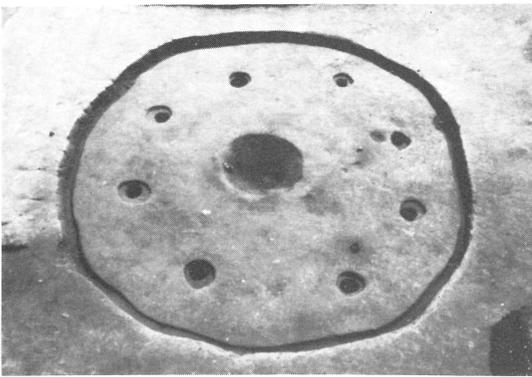
(1) 第Ⅲ区 上面全景 (東より)



(2) 第Ⅲ区 下面全景 (東より)

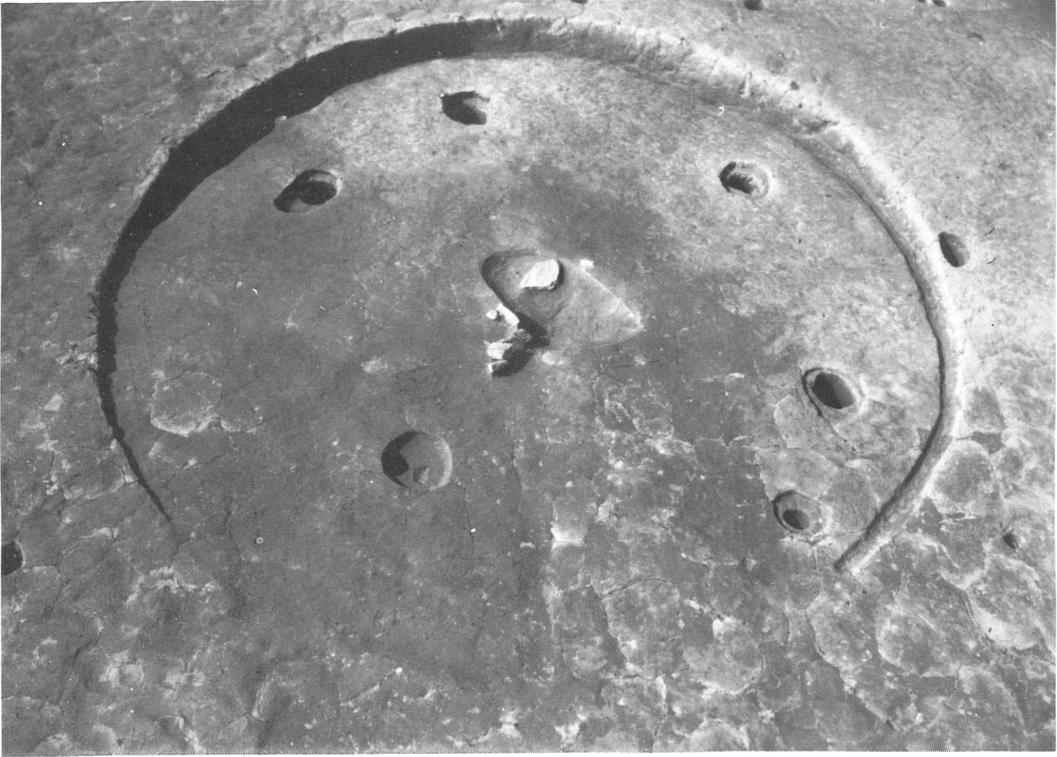


(1) SB 01 完掘状況 (北より)

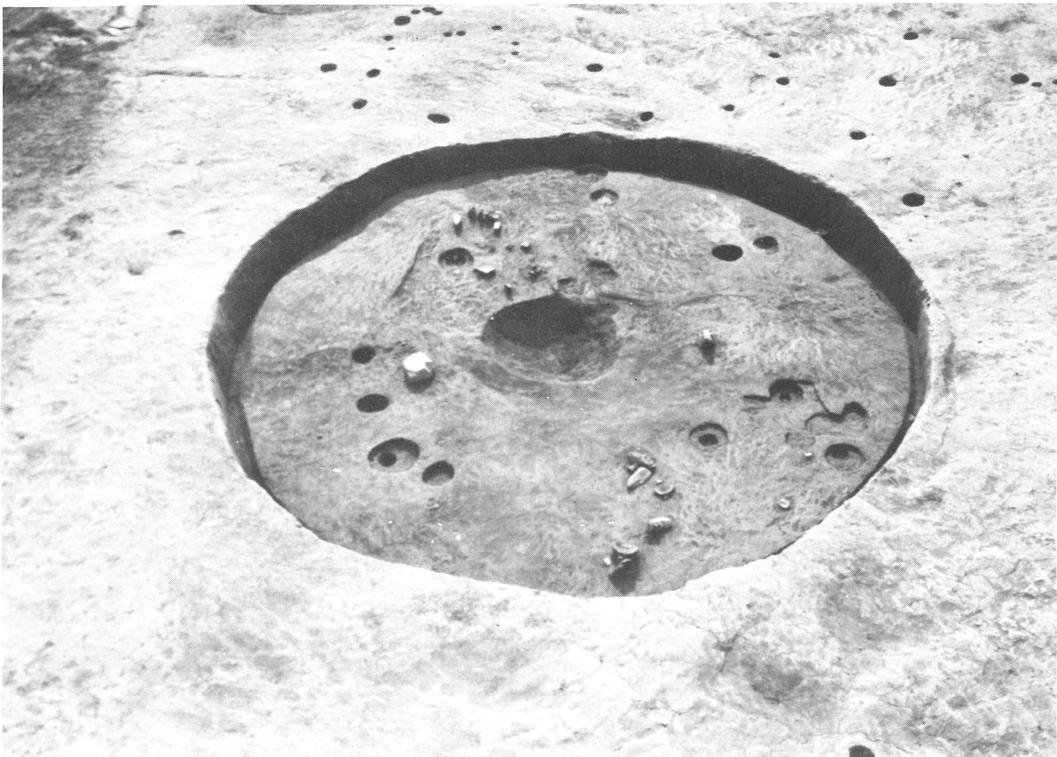


(2) ①SB 01 改築後 (左上)  
③SB 01 改築後に伴う炉 (左下)

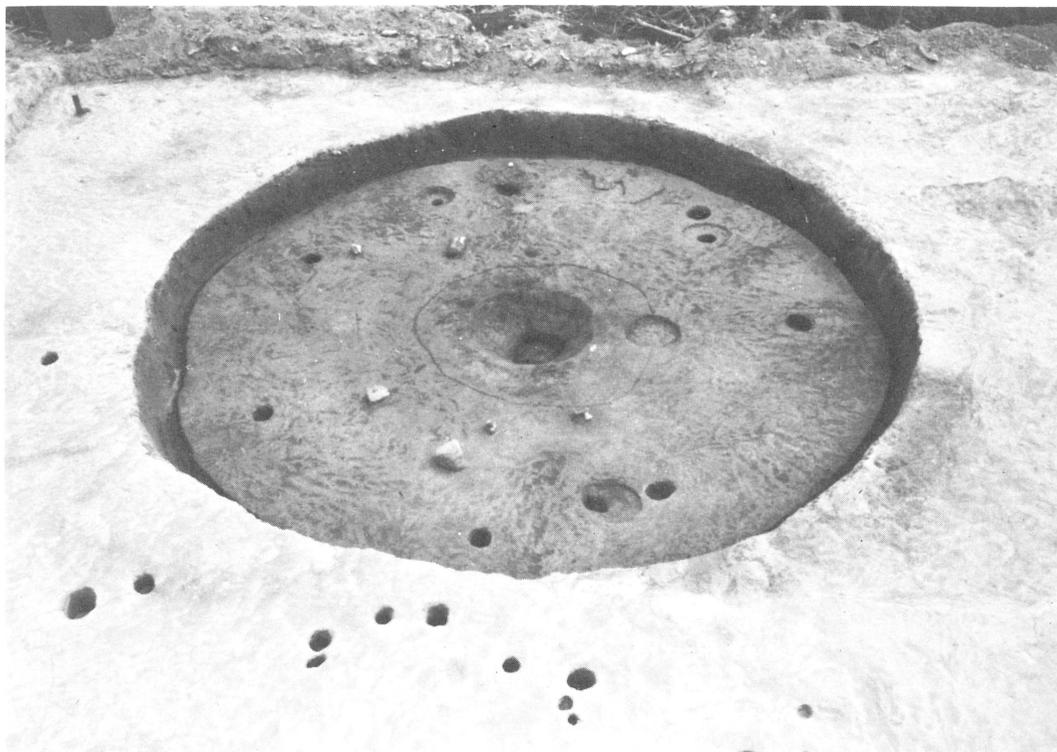
②SB 01 拡張後 (右上)  
④遺物出土状況 (右下)



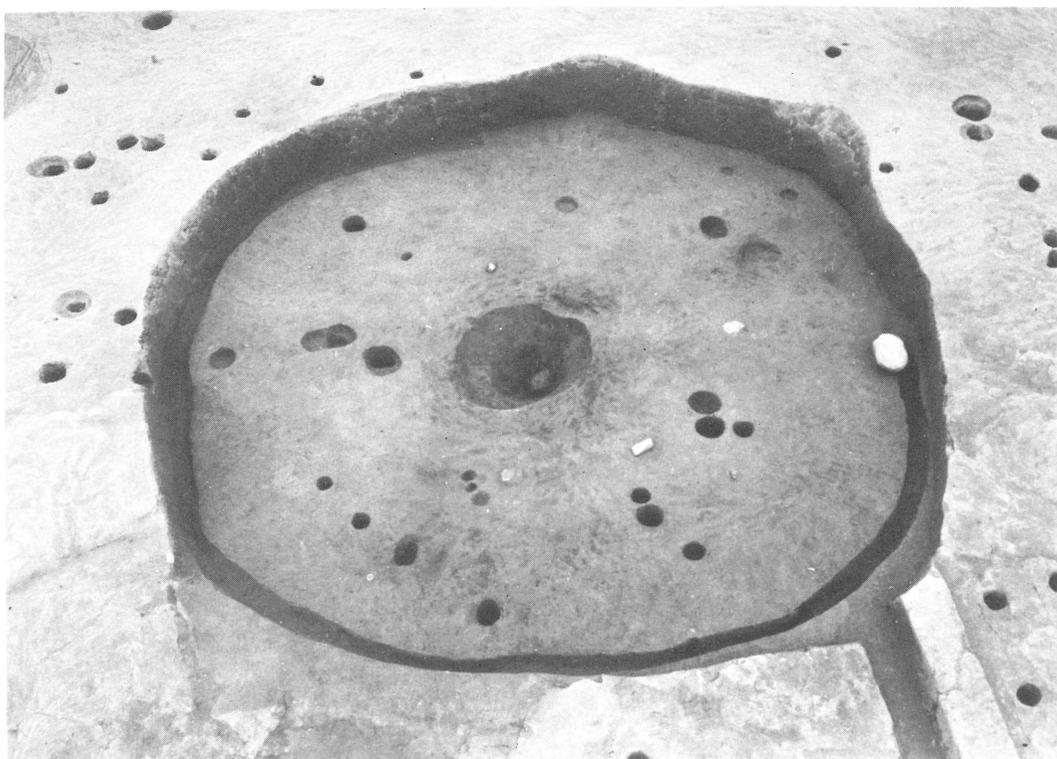
(1) S B 0 2 遺物出土状況 (南より)



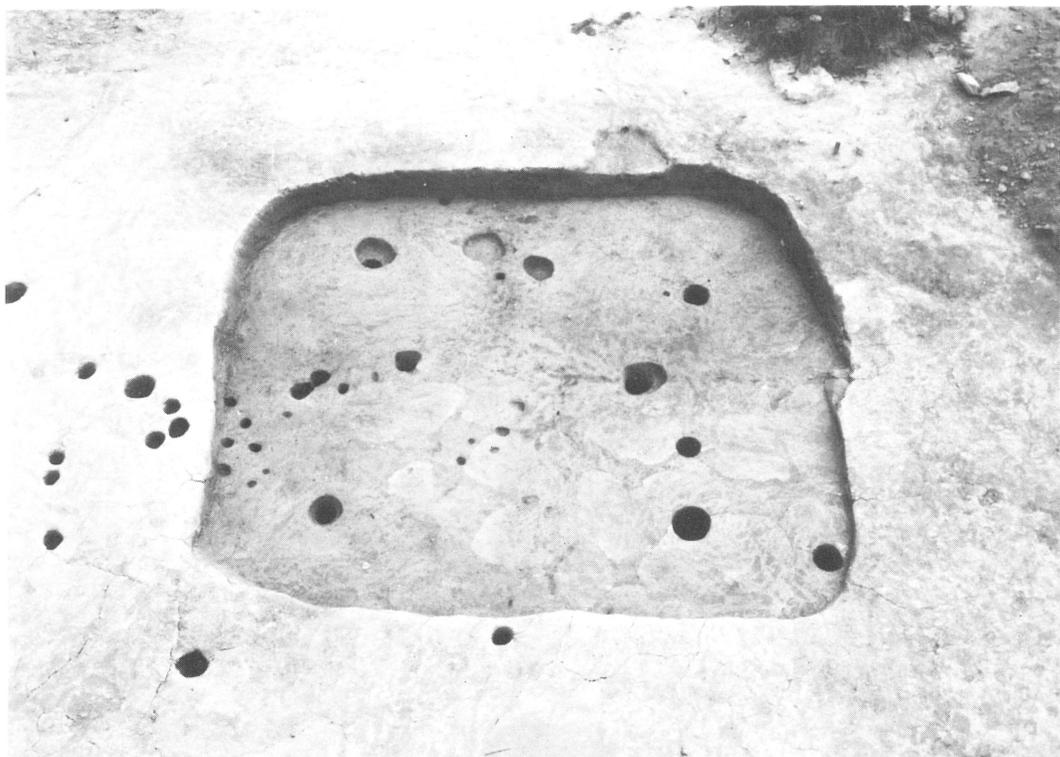
(2) S B 0 3 遺物出土状況 (東より)



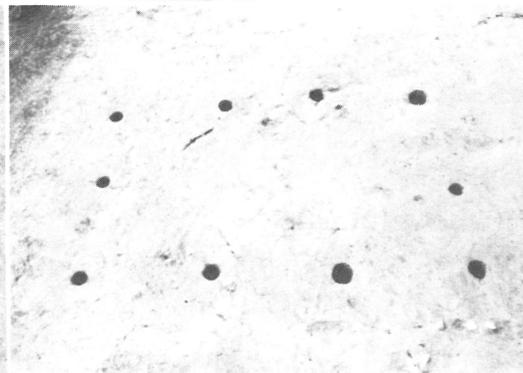
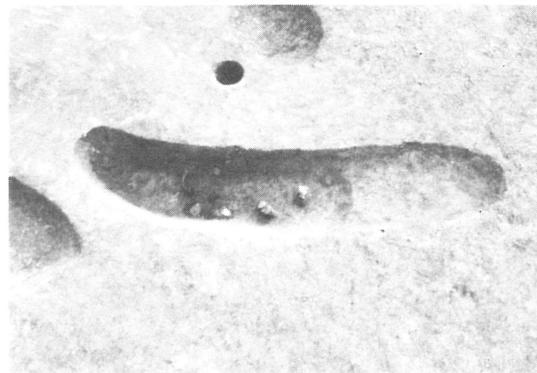
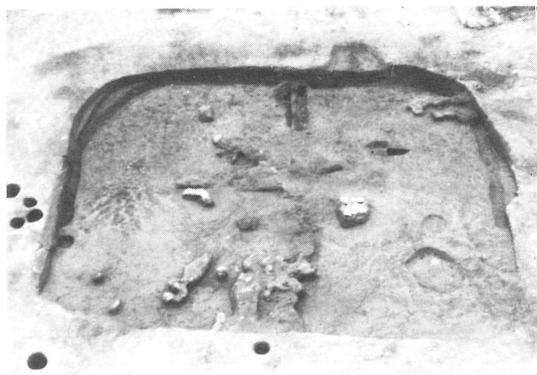
(1) SB05 遺物出土状況 (北より)



(2) SB06 遺物出土状況 (南より)



(1) S B 0 4 完掘状況 (北より)

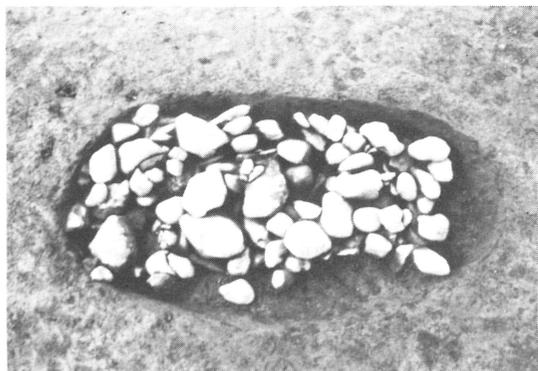
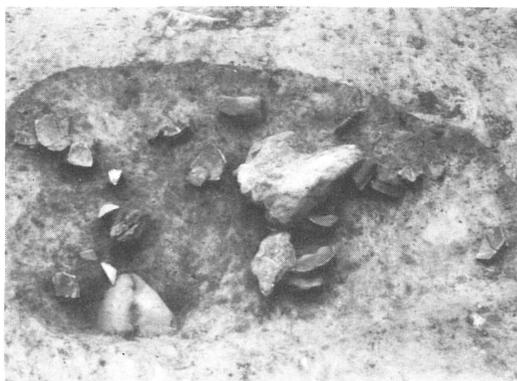


(2) ① S B 0 4 焼失状況 (左上)  
③ S K 3 7 遺物出土状況 (左下)

② S K 2 4 1 遺物出土状況 (右上)  
④ S B 1 0 6 完掘状況 (右下)



(1) 中世土壙群 (南より)



(2) ① S X 2 遺物出土状況 (左上)  
③ S K 92 礫層出土状況 (左下)

② S X 6 遺物出土状況 (右上)  
④ S K 61 焼土塊出土状況 (右下)



1



47



21



26



27



23



22



2



4



25



16



64

1. 2-SB 01 16-SB 03 4-SB 05 47-SK 241  
22. 25. 27. 64-弥生 I 下部 21. 22. 26-弥生 II

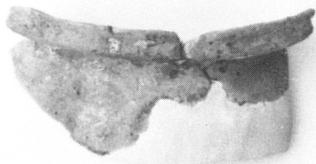
出土遺物



8



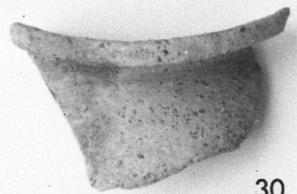
28



7



29



30



10



32



31



9



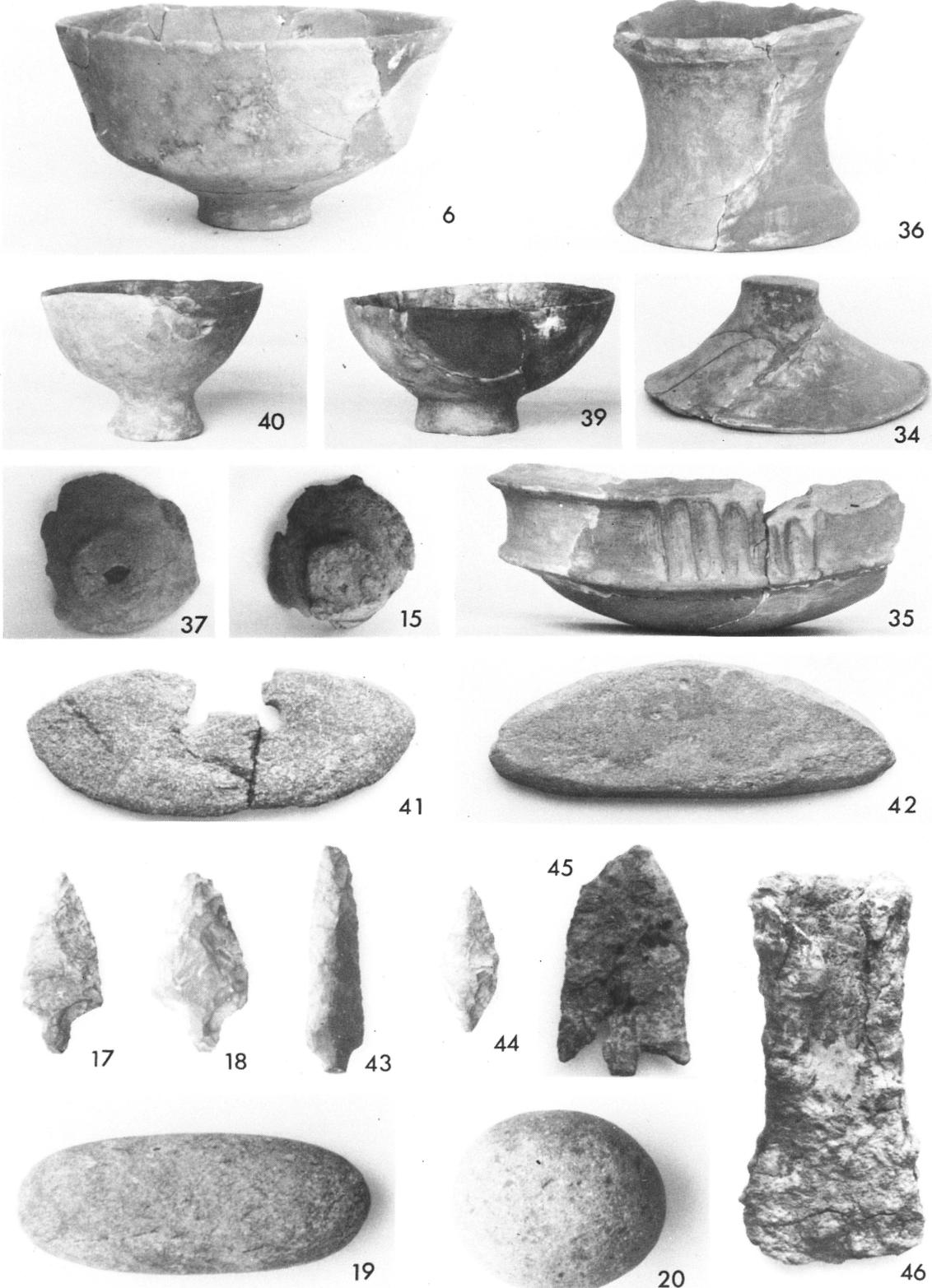
33

7-SB01      10-SB03

8. 9-SB05      28. 33-弥生I下部

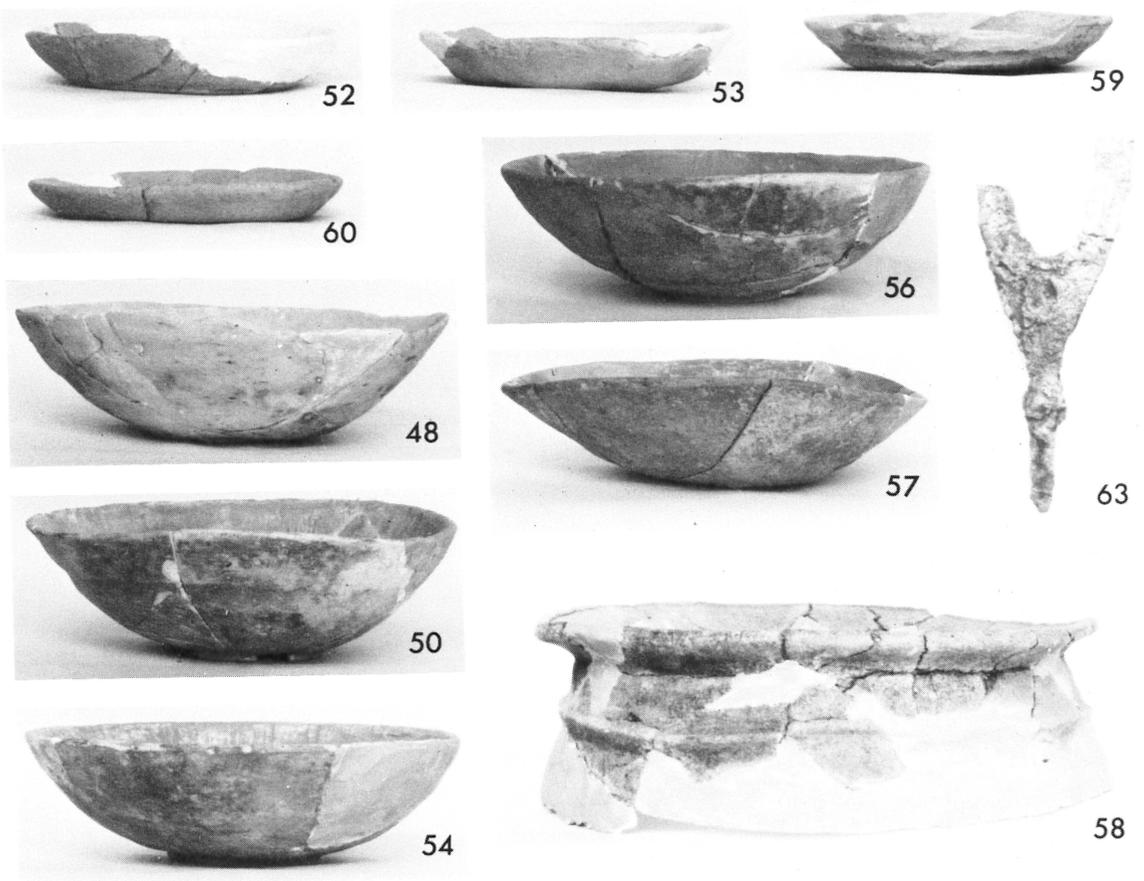
出土遺物

29. 30. 31. 32-弥生II



6. 17-SB01. 18. 19-SB02. 15. 20-SB05. 45-SB05覆土  
 40-SK44 41. 42. 43. 46-弥生I 36. 37. 44-弥生I下部 34. 35. 39-弥生II

出土遺物



52—S X 4    48. 53—S X 6    50—S K 40    54. 56. 57. 58. 59. 60. 63—中世遺物包含層 出土遺物

船岡山遺跡発掘調査概要Ⅱ

昭和56年3月

発行 和歌山県教育委員会  
印刷 邦上印刷